

マックス・ヴェーバーにおける「^{ビルドゥング}教養」

山室 信高*

マックス・ヴェーバーにとって「教養」¹とは何か?——この問いを考察するに当たって、やや奇妙に思われる点がある。

「教養」といえば、ドイツ思想史——中世の神秘論から近代の観念論・新人文主義、さらにショーペンハウアーやニーチェの思想を経て現代の批判理論まで——を貫く一大テーマであるが²、社会科学者であるとともに優れた思想家でもあったヴェーバーならばさぞかしこのテーマに取り組んだのではと思いきや、彼にあってはあまり表立った形では「教養」は扱われていない。この点、同時代のエルンスト・トレルチやゲオルク・ジンメルとはずいぶん様子が異なる³。もちろん「教養」というタームがヴェーバーの著作に出てこないというわけではない。しかしそれが一つのテーマを構成するほどの地位を得ているかどうかといえ、にわかに首肯しがたい。ヴェーバーにとって「教養」はさほど重要ではなかったのだろうか。

マックス・ヴェーバーはいわゆる「教養市民層 (Bildungsbürgertum)」の一員ないし後裔である。「教養市民層」とは19世紀のドイツにおいて社会の指導的地位を占めた知的エリート層を指し、具体的には官僚、法曹、医師、牧師、ギムナジウム教師、大学教授などがこれに含まれる。ヴェーバーは出自からして、父が法律家・官吏(後に代議士)で、母が信仰厚いユグノーの、学究的な雰囲気富二代家柄であり、また自身の経歴としても、人文主義ギムナジウムから大学(法学部)へ進学し、国

* 人間科学総合研究所研究員・東洋大学経済学部

¹ 以下、原則として「教養」をドイツ語の“Bildung”^{ビルドゥング}の訳語として用いるが、「教養」は“Bildung”の意味を十全に捉えておらず、こう訳すと座りが悪いことも多い。場合によっては「形成」や「陶冶」、あるいは「教育」と訳した方がよいこともあるが、いずれにしても最適な訳語はないので、本論ではできるだけ「教養」で一貫させるようにする。“Bildung”の翻訳の困難については、vgl. Reinhart Koselleck: Einleitung—Zur anthropologischen und semantischen Struktur der Bildung. In: ders. (Hrsg.): Bildungsbürgertum im 19. Jahrhundert. Teil II. Bildungsgüter und Bildungswissen. [Industrielle Welt. Bd. 41] Stuttgart (Klett-Cotta) 1990, S. 9-46; S. 13f.

² 通史的記述は、vgl. Ernst Lichtenstein: Bildung. In: Joachim Ritter (Hrsg.): Historisches Wörterbuch der Philosophie. Basel / Stuttgart (Schwabe) 1971, Bd. 1, Sp. 921-937.

³ エルンスト・トレルチ(西村貞二 訳)「ドイツの教養」、『ドイツ精神と西欧』(筑摩書房 1970)、177-221頁所収、およびゲオルク・ジンメル(円子修平/大久保健治 訳)「文化の概念と文化の悲劇」、『ジンメル著作集7 文化の哲学』(白水社 1994)、253-287頁所収、参照。

家試験を受けて司法官試補になるとともに、商法の分野で博士号を取得し、最終的には教授資格を得て、大学教授への道を歩むことになる⁴。外面的には模範的な「教養市民」と言ってよい。問題はヴェーバーの内にその自覚があったかどうかだが、なかったとはやはり考えにくい。「教養市民」としての栄達の表明と見てよいフライブルク大学の教授就任講演『国民国家と経済政策』（1895）で、「私は市民階級（bürgerliche Klassen）の一員であり、また自身そうであると感じており、市民階級の観念と理想（Anschauungen und Ideale）のなかで育まれた」（GPS, 20; MWG I/4, 568）⁵と述べているように、まさに「市民階級の観念と理想」の一つであった「教養」に無自覚であったはずがない⁶。

一方、研究状況に照らして見ると、ヴェーバーにおける「教養」の問題を正面から取り上げたものはあまりない。これもヴェーバーが「教養」について積極的に論じていないことの端的な表れであろう。もっとも1964年にヴェーバー生誕100年を記念して催されたドイツ社会学会のシンポジウム、「マックス・ヴェーバーと今日の社会学」では、「教養および教育の社会学のための専門部会」が設けられて報告と討議が行なわれたものの⁷、これといった反響を呼ばなかったようである。それでもいくつつかめほしい論考はあるが、総じて従来の研究はヴェーバーの著作中で「教養」という語が比較的明示的に（explicit）使用されている箇所を拾い上げて、そこからヴェーバー社会学との体系的連関を探り、「教養」の社会学的意義を見定めようとする正攻法のアプローチをとるものであった⁸。それに対して本論は異なったアプローチを試みたい。すなわち、「教養」をヴェーバーが頻繁に用いる主要な諸概念と対比対照させることで、ヴェーバーにとっての「教養」の意味を浮かび上がらせるという方法をとる。このような方法をとるのは、「教養」はヴェーバーにおいてもっばら暗示的な（implicit）形で問題になっている、いわば「裏テーマ」を成していると思われるからである。

⁴ これに「一年志願兵」の兵役特権を加えてもよい。野田宣雄『ドイツ教養市民層の歴史』（講談社学術文庫1997）、29、80頁参照。

⁵ マックス・ヴェーバーの著作からの引用は以下の略記を用いて、巻数や頁数とともに示す。

GPS: Gesammelte Politische Schriften. Tübingen (J. C. B. Mohr) 1988.

MWG: Max Weber Gesamtausgabe. Tübingen (J. C. B. Mohr) 1984ff.

RS I: Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie I. Tübingen (J. C. B. Mohr) 1988.

WuG: Wirtschaft und Gesellschaft. 5., revidierte Aufl. Tübingen (J. C. B. Mohr) 1972.

⁶ ここで「市民階級」が複数形であることに注目して（ニュアンスとしてはおそらく「階層（Schichten）」に近いと思われるが）、ヴェーバーが三種の市民、すなわち「経済」市民、「政治」市民、「学者身分（Gelehrtenstand）」としての市民に属していたと指摘しているのは、最近のヴェーバーの伝記、Jürgen Kaube: Max Weber. Ein Leben zwischen den Epochen. Berlin (Rowohlt) 2014, S. 19-22. この最後の「学者身分」としての市民が掲げたのが「個人の完成という特殊市民的な理念としての教養」（ebd., S. 23）であった。

⁷ Vgl. Fachausschuss für Soziologie der Bildung und Erziehung. In: Otto Stammer (Hrsg.): Max Weber und die Soziologie heute. [Verhandlungen des 15. Deutschen Soziologentages] Tübingen (J. C. B. Mohr) 1965, S. 279-302.

⁸ 上記の専門部会での Ursula Jaerisch による報告（Bildungssoziologische Ansätze bei Max Weber, S. 279-296）の他に、例えば、Bernd Zymek: Der Beitrag Max Webers zu einer Theorie der Bildung und des Bildungswesens. In: Bildung und Erziehung. 37 (1984), S. 457-474; 西村稔「マックス・ウェーバーと『教養』（一）」、『岡山大学法学雑誌』44-1 (1994)、43-74頁所載、同「マックス・ウェーバーと『教養』（二・完）」、『岡山大学法学雑誌』44-2 (1994)、163-207頁所載。

1. 「生活態度 (Lebensführung)」としての「教養」

まずは大きな切り口から入ることにしよう。ヴェーバーがとりわけ好んで用いながら、ことさら厳密な概念規定を与えていない用語の一つに、“Lebensführung” というものがある。大概の辞書にも載っており、平たく訳せば「生き方」といった程度で、テクニカル・タームというにはありふれたこの語をヴェーバーは彼の著述の要所要所において使っている。もっとも知られた例は『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』(1904-05/1920) (以下『プロ倫』と略) においてのそれだろう。この論文はタイトル通り、「プロテスタンティズムの倫理」と「資本主義の精神」の関係——すなわちその「と」——の具体的解明を試みたものだが、そこで両者の親近関係を示す媒介概念となるのが「禁欲的生活態度 (asketische Lebensführung)」(vgl. RS I, 122f., 183; MWG I/9, 298, 397)、あるいは「合理的生活態度 (rationale Lebensführung)」(vgl. RS I, 195, 202; MWG I/9, 414, 420)⁹ というものである。ヴェーバーはこの宗教社会学的研究の照準をプロテスタンティズムの教義それ自体ではなく、それが一般信者の生活実践に及ぼす影響いかに定めている (vgl. RS I, 18, 86; MWG I/9, 245)。そこで必要とされたのが「生活態度」という概念で、これによって抽象的な理念なり規範なりが個人あるいは特定集団の日常生活の具体的な行為に与える指向性・方向性を問題にすることが可能となった。『プロ倫』では、特にカルヴィニズムの予定説を前提とした厳格な職業倫理が信者たちの「方法的に合理化された倫理的な生活態度」(RS I, 124; MWG I/9, 302) において具現化され、やがて「資本主義の精神」を醸成するに至ると論じられる。

「生活態度」が『プロ倫』のみならず、ヴェーバーの著作全般にわたって中心的な地位を占める概念であることは、これまでのヴェーバー研究が十分明らかにしてきたところである。例えば、代表的な研究者ヴォルフガング・シュルフターは浩瀚な二巻本『宗教と生活態度』(1988) でヴェーバーの理論 (特に宗教および支配社会学) を「生活態度」の観点から再構成することを試みた¹⁰。またシュルフターとは立場を異にする政治学者のヴィルヘルム・ヘニス はヴェーバーの中心テーマを執拗に問うて、「ヴェーバーの著作は社会的行為ではなく、生活態度を取り扱っており、その体系的中心は生活態度に関与しているに相違ない¹¹」とまで言い切っている。このように特筆される「生活態度」と

⁹ 「方法的生活態度 (methodische Lebensführung)」という言い方も見られる (vgl. RS I, 148, 162; MWG I/9, 342, 364)。これらを含めて、『プロ倫』および『経済と社会』での“Lebensführung”の使用頻度、そしてよく組み合わせて使われる形容詞の調査結果は、vgl. Dieter Hermann: Back to the Roots! Der Lebensführungsansatz von Max Weber. In: Gert Albert / Agathe Bienfait / Steffen Sigmund / Mateusz Stachura (Hrsg.): Aspekte des Weber-Paradigmas. Festschrift für Wolfgang Schluchter. Wiesbaden (VS Verlag) 2006, S. 238-257; S. 239-246.

¹⁰ Vgl. Wolfgang Schluchter: Religion und Lebensführung. 2 Bde. Frankfurt a. M. (Suhrkamp) 1988; Bd. 1, S. 17. このシュルフターの試みを引き継ぐ形で、2000年頃からハイデルベルク大学の研究者を中心に「ヴェーバー・パラダイム」と呼ばれる、ヴェーバーの理論的遺産の現代的再生を図るプロジェクトが進行中であるが、上記の Hermann の論考もその一つであることから窺えるように、そこでも「生活態度」はキー概念の一つとなっている。「ヴェーバー・パラダイム」については、このプロジェクトのもう一人の先導役であった M. Rainer Lepsius: Eigenart und Potenzial des Weber-Paradigmas. In: Gert Albert / Agathe Bienfait / Steffen Sigmund / Claus Wendt (Hrsg.): Das Weber-Paradigma. Studien zur Fortentwicklung von Max Webers Forschungsprogramm. Tübingen (J. C. B. Mohr) 2003, S. 32-41 参照。

いう概念をもってヴェーバーが最終的に問題にしたことは何かといえば、あれこれの「生活態度」を通してどういう人間が生まれてくるのか——どのような人間のタイプが刻まれ、どのような人間性が練られ、いかなる人格が培われるのか、ということに他ならない。先に引いた教授就任講演では——今日から見ると胡乱とも思える表現を用いながら——「人間についての学問」である国民経済学が何よりも問題にするのは「経済的・社会的な生存の諸条件によって育成 (heranzüchten) される人間の質」(GPS, 13; MWG I/4, 559) であるとされる。あるいは後年 (1917年秋)、チューリンゲンのラウエンシュタイン城で開催された文化会議での講演「生の諸秩序と人格 (Die Lebensordnungen und die Persönlichkeit)」(vgl. MWG I/15, 707) も題名からして同じ問題を示唆している¹²。そしてこれら二つの講演のほぼ中間の時期に位置する『プロ倫』を見ると、先の「禁欲的」ないし「合理的生活態度」がどのような人間を生み出すかについて、こう述べられている。

ピューリタンの禁欲は——あらゆる「合理的」禁欲と同じく——人間にその「持続的な動機」、特に禁欲自体が「仕込んだ (einüben)」持続的動機を「情動」に対して確保し、貫徹させる能力を与えること、つまり人間をこのような形式的・心理学的な意味における「人格」に育てる (erziehen) ことに作用する。(RS I, 117; MWG I/9, 292)¹³

このように見てくると、ヴェーバーが「生活態度」ということで言い表そうとしているのはほぼ「教養」に相当するのではないかと思われる。「教養」も“Bildung”という原語のごく一般的な意味に立ち帰ってみれば、「形作ること」、「形を与えること」であり、これに人間学的な解釈を施せば、人間の生の無限の可能性 (可塑性) に一定の形を与え、個々の生を作り上げていくことだと言える——試しに“Lebensbildung”と言ってもさほど違和感はなかろう。また「教養」という訳語からはあまり感じられないが、もともと“Bildung”には——動詞 bilden に由来する動名詞として——「動き」の語感があり、もっと言うと「過程・プロセス」としての動態が表現されている。よく言われる

¹¹ Wilhelm Hennis: Max Webers Wissenschaft vom Menschen. Tübingen (J. C. B. Mohr) 1996, S. 99. より詳しくは、ヴィルヘルム・ヘニス (雀部幸隆/嘉目克彦/豊田謙二/勝又正直 訳) 『マックス・ヴェーバーの問題設定』(恒星社厚生閣 1991) を参照。

¹² ヘニスはこの講演について「外的な秩序と内的な『人格』要求との緊張、運命、そしてチャンス、これがテーマになったことであろう。そしてこれが、すなわち一方では人間の人となり、つまり人間性の無限の形成可能性と、他方では『生活諸秩序』[...] との緊張関係が、じっさい彼の生涯のテーマではなかっただろうか」(ヘニス、前掲書、81頁) と述べている。

¹³ この箇所には「われわれになじみの言葉では」と前置きがあり、ヴェーバーはそこで哲学者ヴィルヘルム・ヴァインデルバント (1848-1915) の『意志の自由について』(1904) を参照するよう求めている。ヴェーバーも身近に接していたヴァインデルバントをはじめ、新カント派のこうした言説が「教養」にまつわるものであることは容易に想像がつく。Vgl. Harvey Goldman: Max Weber and Thomas Mann. Calling and the Shaping of the Self. Berkeley / Los Angeles / London (University of California Press) 1988, S. 132-134, 142f. なお『プロ倫』のドイツ語原文の強調箇所 (日本語訳の傍点部分) は原則として RS I (1920年の改訂論文) ではなく、MWG I/9(1904-05の原論文) に従う。

ように“Bildung”はもともと「結果」よりも「過程」に重心があるのだが、「結果」とは言わないまでも、この「過程」の向かう先がどこかといえ、人間の総体、人間性、人格ということになる。いわく「人間形成」、「人格陶冶」は“Bildung”最大のトポスである。ヴェーバーの言う“Lebensführung”——文字通り訳せば「生を導くこと」——には、“Bildung”のこうした意味論的な基本構造（指向性、動的過程性、「人間・人格」への求心性）がひとつとおり備わっている¹⁴。

以上より、ヴェーバーは「生活態度」ということをもって、実のところ「教養」を自己の学問のテーマに据えていたのだと言ってよい。ただ、ヴェーバーは「教養」とは言わずに、一貫して「生活態度」と言い続けた。意味論的な基本構造を共有しているとは言っても、たしかに「生活態度」と「教養」は同義というわけではない。ヴェーバーはこの差異に敏感だったに違いないが、その点についてヒントとなるのは、『経済と社会』のなかの官僚制についての所論で、「この〔官僚制化の〕過程の一つの重要な構成部分、すなわち教育と教養（*Erziehung und Bildung*）の種類に及ぼすその効果については、ここでは手短かに示唆を与えることしかできない」（*WuG*, 576; *MWG I/22-4*, 229）として、余論のように差し挟んだ次の一節である。

一定の教育と教養の享受にもとづく社会的威信はそれ自体官僚主義に特有なものでは全くない。まさに反対である。そうした社会的威信は〔官僚制とは〕異なる支配構造のもとでは、実質的に異なる内容に基礎づけられている。封建制的な、神権政的な、家産制的な支配構造において、またイギリスの名望家行政や古代中国の家産官僚制、古代ギリシアのいわゆる民主政のデマゴグ支配においては、教育の目標と社会的評価の基礎は、これらの事例の間の大きな相違にもかかわらず、「専門人」ではなく——標語風にいえば——「文化人（*der kultivierte Mensch*）」であった。この「文化人」という表現はここではまったく価値自由に、そして次のような意味でのみ用いられている。すなわち「文化的に洗練されている（*kultiviert*）」とみなされた生活態度の質こそが教育の目標であって、特化された専門訓練はそうではないという意味で、である。（*WuG*, 578; *MWG I/22-4*, 233）

この一節は「教養」に関するヴェーバー研究文献では必ずと言ってよいほど引かれ、官僚制支配と伝統的支配の対立構図のもと、『「専門人」タイプ対古い『文化人』の闘争（*ebd.*）について論じられることになるのだが¹⁵、その前に気になるのはヴェーバーの非常に慎重な語法である。ここで「教養」は差し当たり「教育」と並べて代替可能な意味で用いられ、上述の「生活態度」としての「教

¹⁴ 歴史家のラインハルト・コゼレックはおそらくヴェーバーを意識してか、次のように述べている。「教養は一定の教養財や具体的な教養知によっては十分な定義をなし得ない。それでも共通の理念型的な基本特徴があるとすれば、それは自己発見に向かう道の常に途上であるという、かの生活態度（*jene Lebensführung*）に含まれている。」（*Koselleck*: a. a. O., S. 22.）

¹⁵ *Vgl. Stammer* (Hrsg.): a. a. O., S. 282f.; *Zymek*: a. a. O., S. 470ff.; 西村「マックス・ヴェーバーと『教養』(一)」、前掲誌、49-53頁参照。

養」には“Bildung”あるいはその形容詞形の“gebildet”ではなく、“kultiviert”（英語で“cultivated”）という語が当てられているが、ヴェーバーはこの語を「価値自由」に用いる旨、読者に注意を促している。これは裏返せば「教養」という概念を「価値自由」に使用することの困難をヴェーバーが覚えていたということであり、もっと言えば「教養」はそれ自体「価値判断」を含む概念であることを感得していたということである¹⁶。「生活態度」が「価値自由」な使用に耐える概念であり、だからこそヴェーバーが好んで用いたのに対して、「教養」は「価値判断」に曝されやすい概念ゆえに忌避されたように思われる。以下では、ヴェーバーにとって「教養」はいかなる価値内容を持つ概念なのか、さらに論を進めていこう。

2. 「禁欲」と「教養」

先に『プロ倫』における「禁欲的生活態度」というキーコンセプトを確認したが、「生活態度」は何も「禁欲的」なそれや、これと同系列の「合理的」、「方法的」なそれに限らない。これらの「生活態度」は「資本主義の精神」につながっていくことになるので特に強調されているわけだが、ヴェーバーはこの革新的な「資本主義の精神」に対して「伝統主義」という精神のありようを対置している。「伝統主義」の精神というのは、ヴェーバーの引く例によると、出来高払いの賃金体系を導入したにもかかわらず、これまでの賃金水準に達するとそれ以上は働こうとしない労働者（vgl. RS I, 43ff.; MWG I/9, 155ff.）や、資本主義的企業形態をとりながらも前例や慣習の枠内でゆったりとした経営を行なう企業家（vgl. RS I, 48ff.; MWG I/9, 163ff.）に見られるような、現状維持を基本的によしとする精神のことだが、この「伝統主義」もそれ相応の「生活態度」を前提としている。このように「生活態度」は多種多様でありうる。そこでヴェーバーにおいては「教養」もまたそうした「生活態度」の一つであること——つまり上位の抽象概念としての「生活態度」に含まれる形での「教養」の具体的特質——を「禁欲」と対比しながら明らかにしていきたい。

『プロ倫』において「生活態度」としての「禁欲」はまぎれもなくメインテーマを成す。ヴェーバーは「禁欲」の宗教的源泉に遡って、プロテスタンティズムの四つの宗派、すなわちカルヴィニズム、敬虔派、メソジスト派、洗礼派を取り上げるが、特にカルヴィニズム、そのなかでもイギリス（また後にアメリカ）のピューリタニズムに注目し、その信徒たちの「禁欲的生活態度」を理念的に描き出す。そしてこれと対比する形で、敬虔派その他の「禁欲」のありようを見定めようとするのだが、総括的に「カルヴィニズムでない禁欲運動はその禁欲の宗教的動機づけの観点からのみ見ると、カルヴィニズムの内的一貫性の弱体化として現れる」（RS I, 128; MWG I/9, 307）と述べている。ここで私が特に注目したいのは敬虔派（主としてドイツ敬虔派）である。というのも敬虔主義はしば

¹⁶ 西村稔はこの引用箇所の直後にある「教育制度（Bildungswesen）の基礎をめぐる現代のあらゆる議論の背後には […]『専門人』タイプ対古い『文化人』の闘争が潜んでいる」というヴェーバーの言葉を捉えて、「ここでヴェーバーが『価値自由』ということをわざわざ断っているところに、まさに『専門人』と『教養人』 [= 『文化人』] の評価をめぐる激しい闘争が彼の時代に展開されていたことがはっきりと示されている」と指摘している。西村、同上、50頁参照。

しば指摘されるように「教養」の思想の一つの淵源と目されているからである¹⁷。もちろんヴェーバーはここでも直接「教養」との関連で敬虔主義を論じているのではなく、「[...] われわれの特殊な観点にとって敬虔主義は方法的に整備・制御された生活態度、すなわち禁欲的生活態度がカルヴィニズムでない信仰の領域にも入りこんできたということだけを意味する」(RS I, 135; MWG I/9, 318-320)として、彼自身の「特殊な観点」——つまりところ「生活態度」の観点——に立った敬虔派の理解を前面に押し出している。しかしそれでも、あるいはむしろそれゆえに、その論述からは「教養」の基本的な輪郭が浮かび上がってくる。

敬虔主義の特徴として第一にその感情性、感情重視の宗教性が挙げられる。これはカルヴィニズムの地盤の上に生じたオランダやイギリスの敬虔主義にも、またフィリップ・ヤーコブ・シュペーナー(1635-1705)に始まる、ルター派内のドイツ敬虔主義にも等しく当てはまる(vgl. RS I, 133, 143; MWG I/9, 315, 335)。この感情的性格が敬虔派の「生活態度」にどのような帰結をもたらしたかについて、ヴェーバーはこう述べている。

カルヴァン派の信仰にもともと疎遠で、むしろ中世の宗教性のある種の形式に内的に近しいあの感情の要素は実践的な宗教意識を来世のための浄福を確保しようとする禁欲的な闘いではなく、現世における浄福の享受の方向に導いた。(RS I, 133; MWG I/9, 315f.)

またさらに、

[...] カルヴィニズムと比べて生活の合理化の強度が[敬虔派において]どうしても弱まらざるをえなかったのは、永遠の未来を約束する、常に新たに確認されるべき恩恵の地位(Gnadenstand)へ向かう内的なモチベーションが感情的に現在に逸らされ、予定説の信者[カルヴァン派]が弛みない生産的な職業労働を通じて常に新たに追い求めた自己確信のかわりに、[...] あの謙虚で柔弱な性質(jene Demut und Gebrochenheit des Wesens)が定められたからである。(RS I, 143; MWG I/9, 335)

カルヴァン派が感情を抑制して、来世の救いを確信するために、ひたすら職業労働に励んだのに対して、敬虔派は感情を解放・昂揚させることで、この現世にありながら「神との和合と共同を感じる」(RS I, 144; MWG I/9, 336)ことを目指した。これはルター派、そしてさらに中世の神秘主義に由来する「神秘的合一(Unio mystica)」(vgl. RS I, 106; MWG I/9, 276)の敬虔主義的ヴァージョンと見なせよう。

ヴェーバーがここで指摘している敬虔派の感情傾向とその「生活態度」における帰結はいずれも

¹⁷ Vgl. Lichtenstein: a. a. O., Sp. 922f.; Rudolf Vierhaus: Bildung. In: Otto Brunner / Werner Conze / Reinhart Koselleck (Hrsg.): Geschichtliche Grundbegriffe. Stuttgart (Klett-Cotta) 1972, Bd.1, S. 508-551; S. 509-511.

「教養」の特質と解することができる。まず「教養」が人間の総体、全人格を視野に入れている以上、「感情」もその重要な構成要素であることは否めない。一般に「教養」の思想が理性偏重の啓蒙思想へのアンチテーゼであったことを想起すればよいだろう¹⁸。また「教養」もその根は遠く中世の神秘主義思想にまで伸びる¹⁹。「神は自身の像 (Bild) を象って人間を創った」(『創世記』1, 27) ということから、「神の似姿 (Imago Dei, Ebenbild Gottes)」としての人間の“Bild”(理想像)に近づくことが“Bildung”の神学的原義となった。そしてこの思想は後に敬虔主義者たちの好んで受け継ぐところとなるが、この神学的文脈では“Bildung”は「どちらかといえば受動的な、いずれにせよ受動的な意味」²⁰を示している。ヴェーバーが敬虔派に認める「現世における浄福の享受」や「謙虚で柔弱な性質」といった基本的な「生活態度」は「教養」のこの受動的・受動的意味合いに見合っている。カルヴァン派の「禁欲的生活態度」が来世の栄光のために現世を改変しようと積極的に働きかけるのと対照的に、敬虔派は現世で神性を受容・享受し、心豊かに生きようとするのである。そうして当の現世の世俗化が進み、神のかわりに世俗の文物が主たる関心となれば、いわゆる「教養」の「生活態度」が成立するのは想像に難くない。

もう一つ、ヴェーバーが強調する敬虔派の特徴は“Konventikel”と呼ばれる小規模な信者の集会を作ったことである。カルヴァン派内の敬虔派であれ、ルター派内のドイツ敬虔派であれ、彼らは教会に属しながら信仰の再生運動を担ったのだが、その際に有力な手法となったのが「教会内の小教会 (ecclesiola in ecclesia)」(vgl. MWG I/9, 315, Anm. 40)とも呼ばれるこうした集会であった。有名なのはシュペーナーが主催した“collegia pietatis”(「敬虔なる集い」)(vgl. RS I, 135; MWG I/9, 319)で、そこでは主に聖書の講読会が開かれ、平信徒の信仰生活に深く関与することになった。

他方、予定説のもっとも強い影響を被ったカルヴィニズムないしピューリタニズムにおいては、この教説の「悲壮な非人間性」ゆえに「一人ひとりの個人の内的な孤独化」(RS I, 93; MWG I/9, 259)がもたらされたと言ふ。ヴェーバーは言う。カルヴィニストやピューリタンにとって、たとえ教会に加入していたとしても、救済という究極の問題に関しては教会は原理的に何の助けにもならない。「深い内面的な孤独化のなかで [...] カルヴィニストの神との交わりは遂行された」(RS I, 97; MWG I/9, 263f.)のである。そこでヴェーバーはこの「内面的孤独化」によるカルヴィニストやピューリタンの「生活態度」上の二つの特性を挙げている。一つはいわゆる「被造物神化」の拒否で、これは上で述べた敬虔派の感情的要素の重視と真っ向から対立する、「文化と信仰におけるあらゆる感覚的・感情的要素に対する [...] 全否定的な立場」、「あらゆる感覚文化一般からの原理的な離反」(RS I, 95;

¹⁸ 啓蒙との関係については、vgl. Koselleck: a. a. O., S. 19f. ただしそこでもカントの有名な啓蒙のモットーを引きつつ述べられているように、理性(ないし悟性)を重んじる啓蒙は単に否定されたというのではなく、「全人とその自己形成 (Selbstbildung)」を目指す「教養」に包括されたと見るのが妥当である。

¹⁹ Vgl. Lichtenstein: a. a. O., Sp. 921f.; Vierhaus: a. a. O., S. 509f.

²⁰ Koselleck: a. a. O., S. 17. そうした受動的・受動的意味の用例として「神を自分自身のなかに作り入れる (einbilden)」、「キリストを通して自分自身を作り変える (umbilden)」や、敬虔主義者ゴットフリート・アーノルト(1666-1714)の「そうして[神の]恩恵は人間を作る (bilden)」といった言葉が引かれている。

MWG I/9, 261) ということであり、そしてもう一つは「あの醒めた、悲観的な色合いの個人主義」(ebd.) である。こちらからは「あの神への信頼の排他性」が極まって、「人の援助や人の友情を頼みにすることへの警戒」(RS I, 96; MWG I/9, 262) といった徹底的な隣人不信の態度が生じることもあった。

このようにカルヴィニズム＝ピューリタニズムでは個人がその「内面的孤独化」において、世俗の感覚的な喜びを断ち、隣人との深い交際も避け、たった一人で絶対的に超越した神に向き合うのが基本的な信仰生活のありようであったが、それに対して敬虔派は先述したように感情的な信仰に傾くとともに、聖書サークルのような小集会を通じて信徒どうしの交流を活発に行ない、ある種社交的な信仰生活を営んだと言える。この種の社交性は「教養」にとって一つの不可欠な条件である。たしかに一般的には「教養」はあくまで個人的な営みと想像されがちだが、卑近な例をとれば、「教養」の名のもとにさまざまな講習会やサークル活動、旅行ツアーといったものが今なお盛んであるのを見ても、「教養」は個別の頭脳だけでなく、人間どうしの感性および身体の交流も含めた社交的な営みであることが窺える²¹。なお付言するに、ヴェーバーはこのことを軽く示唆するだけだが、ハレの敬虔派の代表であるアウグスト・ヘルマン・フランケ(1663-1727)が奨励したという「信仰日記(re-ligiöse Tagebücher)」(RS I, 136, Anm. 5; MWG I/9, 322, Anm. 88)の習慣——これはカルヴァン派でも行なわれた(vgl. RS I, 123; MWG I/9, 300f.)——は敬虔派においては自分自身との内面的対話にとどまらずに、信者どうしの活発な手紙のやりとりへと発展する。郵便制度の発達と相まって、敬虔派の広汎なネットワークがドイツ各地にできあがる²²。18世紀から19世紀にかけて、ドイツで「教養」の思想の全盛期に「書簡文化」と言ってよいほどの手紙による交信が盛んに行なわれたのはこの「敬虔主義の遺産」²³の開花である。その際、自己省察と相手の自我との交感を同時に含む手紙が「教養」の強力なメディアになったことは言うまでもない。

以上、カルヴィニズム＝ピューリタニズムと対比した敬虔主義についてのヴェーバーの理念型的記述を手がかりに、前者の「禁欲的生活態度」に対する後者の「教養的生活態度」の特質を描き出してみた。ヴェーバーがまとめとして「ドイツ敬虔主義をわれわれにとって重要な観点のもとで見ると、その禁欲の宗教的定着の点で動揺と不安定を認めざるをえないだろう。それはカルヴィニズムの妥協のない首尾一貫性に対して大幅に後れをとるものであって、一つにはルター派の影響、もう一つには

²¹ Vgl. Koselleck: a. a. O., S. 23. 「[...] 身体、心情、情緒、そしてあらゆる感性と精神とは教養が遂行されるべき場となる、常に新たに心理的葛藤が繰り広げられる緊張野(Spannungsfeld)に属する。そうして求められる自己発見はそもそもの初めから人間相互の關係に依存している[...]。個人に固有であるとともに集団に特有な社交性は教養にとって本質構成的な要素である。『というのも社交は人間の総体を目標とする全教養にとって真のエレメントであるからだ』とフリードリヒ・シュレーゲルは1799年に書いている。」(ebd., S. 21f.)

²² 森涼子『敬虔者たちと<自意識>の覚醒 近世ドイツ宗教運動のマイクロ・ヒストリア』(現代書館 2006)、第2章、特にフランケの交友圏については、62、64-65頁参照。

²³ Koselleck: a. a. O., S. 23. ちなみにヴェーバーがもっとも依拠している敬虔主義の文献、シュペーナーの『神学的熟慮(Theologische Bedenken)』(1700-02)のタイトルの続きは「特に敬虔な心を養うための靈的な題材への手紙による回答」という。MWG I/9, 238の隣の写真頁を参照。

その信仰の感情性に帰せられる」(RS I, 143; MWG I/9, 335)と述べているように、「禁欲」の不徹底という点に敬虔派の「生活態度」の主要な諸特徴がネガティブな形で確認されるのだが、それらをポジティブに浮き立たせてみると「教養的生活態度」が識別できるのである。

3. 「精神なき専門人」と「心情なき享楽人」

これ以後、ヴェーバーは禁欲的プロテスタンティズムを「ひとかたまりとして」(RS I, 164; MWG I/9, 366)扱い、「資本主義の精神」への変貌を論じていくことになるのだが、そこでイギリスのピューリタンの代表としてリチャード・バクスター(1615-1691)の著作を主に取り上げつつも、同時にドイツ敬虔派の代表としてはシュペーナーを適宜参照しており(vgl. RS I, 164; MWG I/9, 368)、上で確認してきた両派の差異は『プロ倫』のライトモチーフの一つとなって最後まで貫かれる。周知のように、この論文の最後は近代資本主義への、いやさらに近代文化一般への批判、あの「精神なき専門人(Fachmenschen ohne Geist)、心情なき享楽人(Genußmenschen ohne Herz)」(RS I, 204; MWG I/9, 423)批判である。この一節がそれまでの叙述のトーンからはやや調子外れで、いま一つ文脈の収まりがよくないことは一読感得されるところだが、それもそのはずで、ヴェーバー自身そのことを自覚しており、「われわれはここで、この純粹に歴史的な叙述に求めるべきではない価値判断・信仰判断の領域に立ち入ってしまった」(ebd.)と告げている。しかしそうであればこそ、ここには今まで表面に現れてこなかったヴェーバーの「教養」観が顔を覗かせている——ただし、「教養」批判というなおネガティブな形ではあるのだが。

ヴェーバーはこの一節でドイツの「教養」の歴史において二人の大きな存在に言及している。一人はゲーテである。ゲーテは「教養」の思想を紡いだというよりは、むしろ彼自身的人格と作品を通じて「教養」を体現した存在と考えられていたが²⁴、そのゲーテについてヴェーバーはこう書いている。

近代的な職業労働が禁欲的な刻印を負っているという思想はもちろんこれといって新しいものではない。専門労働への限定とそれに伴うファウスト的な人間性の全面展開への断念は今日の世界ではおよそ価値ある行為の前提であり、したがって「行為(Tat)」と「諦念(Entsagung)」は今日互いに切っても切れない関係にあること、すなわち市民的な生活様式[...]が持つこの禁欲的な基本モチーフは、ゲーテもまたその人生智の高みに立って、『遍歴時代』とファウストに与えた終焉とを通じて、われわれに教えようとしたことだった。彼にとってこの認識は、アテネの最盛期が古代において繰り返されなかったのと同様に、われわれの文化発展の行程にあってもおそらく繰り返されることのない豊かで美しい人間性の時代からの諦念に満ちた別れを意味した。(RS I, 203; MWG I/9, 421f.)

²⁴ Vgl. Vierhaus: a. a. O., S. 518.

ヴェーバーはここでゲーテを明らかに「禁欲」の方向性で理解しようとしており、「教養」の方は「ファウスト的な人間性の全面展開」や「豊かで美しい人間性の時代」として——「アテネの最盛期」という「教養」の理想郷としての古代ギリシアとのアナロジーに注意²⁵——指示されながらも、それらはゲーテにとって「諦念に満ちた別れ」の対象と見なされている。ヴェーバーの念頭に浮かんでいるのは、『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』（1821-29）および『ファウスト第2部』（1831）を書き上げた晩年のゲーテである。小説『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』は副題を「諦念の人々（die Entsagenden）」といい、ヴェーバーがここで参照しているアルベルト・ビルショフスキ（1847-1902）の評伝『ゲーテ』（1904）によれば、その「二大根本思想は労働と諦念である」。そして「行為とは […] 創造的で有益な労働にほかならない。そのような労働を完成するために人間は専門的な知識を必要とする。専門的知識は一つの狭い領域に限定することによって獲得される。 […] みずからを限定しようとする者は諦念にいたらざるをえない」（vgl. MWG I/9, 421, Anm. 79）²⁶。いわゆる「教養小説（Bildungsroman）」の範型と目される『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』（1795-96）では、自己の自由円満な発現を求めて演劇の世界に身を投じる主人公の生き様や「美しき魂の告白」と呼ばれる、敬虔主義の流れを汲む「ヘルンフート派」にシンパシーを抱く女性の心情豊かな手記²⁷が読まれるのだが、こちらのゲーテの古典主義的代表作ではなく、後の『遍歴時代』の方を引くヴェーバーは、ゲーテの人生と作品の歩みに「教養」から「禁欲」への「生活態度」の転換を読みとっているのである。

もう一人は名前こそ出てこないが、ニーチェである。ヴェーバーが最後に持ち出す「この文化発展の『末人たち（letzte Menschen）』」（RS I, 204; MWG I/9, 423）はニーチェの『ツァラトゥストラはこう語った』（1883-85）に由来することは明らかである²⁸。この書物の初め、「ツァラトゥストラの前口上」に「超人（Übermensch）」と対比させてこの「末人」が話題に出てくる。「末人」は「もっとも軽蔑すべき者」、それどころか「自分自身をもはや軽蔑できないほどのもっとも軽蔑すべき人間」²⁹である。「われわれは幸福を発明した」と彼らは得意気に言う。彼らはぬくぬくとした暖かみを求め、病気になるように健康を重んじ、働くことは働くが娯楽程度に済ませ、みな同じものを望み、みな同じように振る舞う。「超人」が「人間とは超えられるべき何ものかである」³⁰という意味で、人間

²⁵ ゲーテを含め、新人文主義や観念論の思想家たちは一様に古代ギリシアに「教養」の範を仰いでいた。Vgl. Vierhaus: a. a. O., S. 518f.

²⁶ アルベルト・ビルショフスキ（高橋義孝／佐藤正樹 訳）『ゲーテ——その生涯と作品』（岩波書店 1996）、1044、1079 頁。

²⁷ ゲーテ（山崎章甫 訳）『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代（中）』（岩波文庫 2000）、261 頁以下、特に 330 頁以下を参照。ツィンツェンドルフ伯（1700-1760）が興したヘルンフート派についてのヴェーバーの記述は、vgl. RS I, 139-143; MWG I/9, 326-335.

²⁸ デートレフ・ポイカート（雀部幸隆／小野清美 訳）『ヴェーバー 近代への診断』（名古屋大学出版会 1994）、III「最後の人々」参照。

²⁹ Friedrich Nietzsche: Also sprach Zarathustra. In: Karl Schlechta (Hrsg.): Friedrich Nietzsche. Werke in drei Bänden. Bd. 2. München (Carl Hanser) 1955; S. 283, 284. 以下の引用・要約も同所。

³⁰ Ebd., S. 279.

の限界を超越していく存在であるのに対して、「末人」は快適な現状に満足しきって、そこから一歩も出ようとしない。こうしたツァラトゥストラによる「末人」批判を「教養」の文脈で読み換えるならば、かつてニーチェが『反時代的考察』(1873-76)の第一論文「ダーフィット・シュトラウス 告白者と著述家」で展開した「教養俗物 (Bildungsphilister)」批判と重なってくる。神学者ダーフィット・シュトラウス (1808-1874) に代表される「教養俗物」は自分に「教養」があると妄想して、実は「俗物」であることをまるで自覚していない。「このあらゆる自己認識の欠如のために、彼は自らの『教養』がまさに正当なドイツ文化の満ち足りた表現であると強く確信し、そしていたるところで自分と同類の教養人を見出しては [...] 現代のドイツ文化の尊敬すべき代表者であるという勝ち誇った感情をまたいたるところで触れ回る [...]」³¹。真のドイツ文化をどこまでも探求してやまない「探求者 (Suchende)」³²——彼らこそニーチェにとって「真の教養」の体現者である——に対して、「教養俗物」はもはや何事も探求せず、我こそはドイツ文化を所有していると思ひこみ、自己満足に浸っている。「もはや探求されてはならない、これが俗物のモットーである。」³³ こういう「教養俗物」の成れの果てが「末人」である。

一方、ヴェーバーはニーチェの言う「末人」を自らの「禁欲」の論旨に引きつけて、こう述べる。

今日、禁欲の精神は——最終決定的か否か、誰が知ろう——この殻 (Gehäuse) から抜け出てしまった。[...] 将来何者があの殻の中に住まうことになるのか、このとてつもない発展の果てにまったく新しい預言者が現れるのか、あるいは古い思想や理想の力強い復活が起こるのか、それとも、そのどちらでもないとしたら、機械的な硬直が一種の引き攀った傲慢さ (Sich-wichtig-nehmen) に装われて生じてくるのか、まだ誰にもわからない。ただそうなればこの文化発展の「末人たち」にとっては次の言葉が真実になるかもしれない。「精神なき専門人、心情なき享楽人——この無の存在は人間性のいまだかつて到達したことの無い段階にまで登りつめたとうぬぼれる。」(RS I, 204; MWG I/9, 422f.)

ここで言われる「殻」、すなわち「鋼鉄のように硬い殻 (stahlhartes Gehäuse)」(ebd.) とは資本主義の強大な秩序システムのことで、それはもともと「禁欲の精神」に支えられていたが、いまやこの「禁欲の精神」がそこから抜け出てしまい、いわばもぬけの殻になってしまった。ヴェーバーの書きぶりからして、「新しい預言者」や「古い思想や理想の復活」は望むべくもなく、「機械的な硬直」がさながら死後硬直のようにして起こる。そしてそこに現れるのが「一種の引き攀った傲慢さ」を備えた「末人たち」というわけである。そこで極めつきの引用が来るが、自然な流れからすればニーチェに

³¹ Friedrich Nietzsche: *Unzeitgemäße Betrachtungen*. In: Karl Schlechta (Hrsg.): a. a. O., Bd. 1. München (Carl Hanser) 1954: S. 142.

³² Ebd., S. 144.

³³ Ebd., S. 145.

拠ったのだらうと思われるこの言葉の出典は長らく不明だった。ところがつい最近（2016年3月）、有力な出典が——やや意外な方面で——確認された³⁴。それは当時の国民経済学の大家にして社会政策学会の首領、グスタフ・シュモラー（1838-1917）の主著『一般国民経済学概論』の第1部（1900）に見られる。シュモラーは「技術の発展が国民経済に対して持つ意義」という章の終わりで、機械の時代である現代における技術の功罪を論じている。一方で「技術が向上すればするほど、それはますます偶然を制御できるようになる。進歩する技術はすべて自然に対する精神の勝利を意味する」³⁵。しかし他方で、技術を通じた「自然支配におけるあらゆる進歩」は「人間が自分自身を制御し、社会が経済生活の革新的な様式を永遠の倫理的な理想に則って組織することを心得ている」限りで有益である。技術は日進月歩である反面、「高貴な信念、宗教的な感性、繊細な感覚が指導的な経済集団において進歩していない」。一方的な技術礼賛ではなく、人間の倫理的な主体性を重んじるシュモラーらしい論であるが、さらにこう続く。

数年前、ある偉大な技術者自らがわれわれの自信過剰な（überstolz）時代を次のような当たって
いなくもない言葉で特徴づけてみせた。「愛情なき享楽人（Genußmenschen ohne Liebe）と精神なき
専門家——この無の存在は人類（Menschheit）の歴史上到達したことの無い高みに立っている
とうぬぼれる！」

「ある偉大な技術者」の言葉というだけで、シュモラーが詳しい出典を挙げていない以上、正確なところはよくわからないが、ヴェーバーがこの箇所を読んで、この言葉に強い印象を受けたことは間違いないだろう。しかもシュモラー以上に、この言葉を重く受けとめているように思われる。シュモラーが「当たっていなくもない（nicht unwahr）」と若干留保をつけているのに対して、ヴェーバーは一步進んで「真実（Wahrheit）」味を感じとっている。さらに語順と文言を微妙に変えていることにも注意したい³⁶。ヴェーバーは「精神なき専門家」を先に持ってきているが、それは彼にとって、「禁欲の精神」が失われて、こわばった「殻」の中に閉じこもりながら自己の専門的な職業に機械的に勤しむ人間の未来像が『プロ倫』のメインテーマを成す「禁欲的生活態度」の行く末によりよく見合うからである。そしてもう一方の「享楽人」の方はどうかというと、ヴェーバーは「愛情」を「心情」に置き換えて、広く感覚・感情一般を問題にしているようだが、それは決して修辭的に無内容な「心

³⁴ ここで参照している MWG I/9, 423, Anm. 84 には「引用として証明されず」とあるが、1920年の改訂論文の方を収めた最新刊（2016年7月）の MWG I/18, 488, Anm. 78 には出典情報が記載されている。これについては同巻編集者のヴォルフガング・シュルプター氏（ハイデルベルク大学）に個人的教示を受けた。記して感謝する。なおこの出典の初出は次の新聞記事である。Hans-Christof Kraus: Dieses Nichts von Fachmensch und Genussmensch. In: Frankfurter Allgemeine Zeitung vom 30. März 2016, Nr. 74.

³⁵ Gustav Schmoller: Grundriß der Allgemeinen Volkswirtschaftslehre. 1., größerer Teil. Leipzig (Duncker & Humblot) 1900, S. 225. 以下の引用も同所。

³⁶ Vgl. Kraus: a. a. O., Sp. 5.

情」ではない。先の「精神」が「禁欲の精神」であったのに対し、「心情」とはここで何よりも「教養の心情」のことである。それはまさに上で見た敬虔派の感情豊かな信仰生活が育んだ「心情」である。敬虔派の信者たち、あるいはその伝統を引く「教養」ある人々はいわば「心情ある享楽人」と呼ぶことができる。「享楽 (Genuß)」という否定的なニュアンスを伴いがちだが、ヴェーバーが敬虔派の「生活態度」上の特性として挙げていた「現世における浄福の享受 (diesseitiger Genuß der Seligkeit)」や「謙虚で柔弱な性質」という受動的・受動的な態度は「享楽」の洗練されたありようである。それは遡れば、先に見た中世神秘主義における“Bildung”の「受動的な意味」にも求められるし、下っては「教養」の思想史上の代表的存在であるヨハン・ゴットフリート・ヘルダー (1744-1803) やヴィルヘルム・フォン・フンボルト (1767-1835) における「享受・享楽」の積極的語法³⁷にもなお明瞭に認められる。こうした「教養」の思想史的展開を背景に、ニーチェによる「教養俗物」から「末人」への「教養」批判の文脈をヴェーバーは彼なりに受け継ぐことで、「心情なき享楽人」の像を引き出してきた。この「教養の心情なき享楽人」もまた資本主義システムの強固な「殻」の中であって、機械的に繰り返される刹那的な享楽に身を委ねるばかりである。そうして「人間性のいまだかつて到達したことのない段階にまで登りつめたとうぬぼれる」のである。「教養」を通して到達されるはずであったあの「豊かで美しい人間性」の高みに、「教養」を失って久しいにもかかわらず登りつめたとうぬぼれる (einbilden) —— 「うぬぼれも教養のうち (Einbildung ist auch eine Bildung)」という俚諺は「末人」たる彼ら「心情なき享楽人」にはもはや当たらない。

ヴェーバーにおける隠れた「裏テーマ」としての「教養」をこれまで追ってきた。簡単に振り返るならば、それはまず大きく「生活態度」として掘み出すことができ、次にその「生活態度」のうちの特に敬虔派的なありようとして、カルヴィニズムの「禁欲的生活態度」と対質させることで、その具体的な特質が浮き彫りになり、最後に、ゲーテとニーチェの「教養」批判を経由して、ヴェーバー自身の価値判断を含む人間のヴィジョン、すなわち資本主義の「鋼鉄の硬い殻」の中で自閉し自足した、「(禁欲の) 精神なき専門人」に対する「(教養の) 心情なき享楽人」の像として結実するに至った。全体的に見て、ヴェーバーにとって「教養」はネガティブな姿を呈しており、その未来もまた暗いようである。しかし本論はほぼ『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』の分析に終始してしまったため、ここで明らかにしたヴェーバーの「教養」観は根本的ではあっても、一面的に過ぎるかもしれない。少なくとも『職業としての学問』をはじめとするヴェーバーの学問論の検討は、当

³⁷ 例えば、J・G・ヘルダー (嶋田洋一郎 訳) 『ヘルダー旅日記』(九州大学出版会 2002)、5頁、24頁の「享受する」の用例を参照。なおその訳註には「ヘルダーの言う『享受』は今日の用法に見られる平板な官能性と関係がなく、もっぱらあらゆる力の活動性と結びつくことによって、形成ならびに人間性概念と密接に結びついている」(傍点引用者)とある。フンボルトについては、フムボルト (小口優 他訳) 『教養への道 或る女友達への書簡 (上巻)』(モダン日本社 1942)、74-76頁の手紙の一節、特に「純粹な、落ち着いた、静かな享楽」という言い方に注意。また、vgl. W. H. Bruford: *The German Tradition of Self-Cultivation. 'Bildung' from Humboldt to Thomas Mann.* New York (Cambridge University Press) 1975, S. 2, 5.

時の学問や大学をめぐるアクチュアルな状況も視野に入れつつ、彼にとっての「教養」を——そのポジティブな可能性も含めて——考察する上で不可欠だと思われるが、これは他日を期することにした
い。

【Abstract】

“Bildung” bei Max Weber

Nobutaka YAMAMURO*

Das Thema “Bildung” scheint im Werk Max Webers nicht so sehr explizit, als vielmehr implizit behandelt zu werden. Die vorliegende Arbeit versucht vor allem in seiner Studie “Die protestantische Ethik und der Geist des Kapitalismus” (1904-05/1920) das versteckte Thema “Bildung” herauszuarbeiten. Zunächst wird auf semantische Ähnlichkeiten von “Bildung” mit dem von Weber sehr häufig benutzten Begriff der “Lebensführung” hingewiesen. Dann wird ein inhaltlicher Vergleich der “asketischen Lebensführung” des Calvinismus mit der eher gefühlsmäßigen und innerlichen “Lebensführung” des Pietismus angestellt, die man als “gebildet” bezeichnen kann. Schließlich ist aus der düsteren Vision von “Fachmenschen ohne Geist” und “Genussmenschen ohne Herz” am Ende der Studie Webers “Bildungs”-Kritik herauszulesen.

Key Words : Max Weber, Bildung, Lebensführung, Askese, Pietismus (Max Weber, cultivation (Bildung), life conduct, asceticism, pietism)

マックス・ヴェーバーにおいて「教養」のテーマはそれほど明示的に扱われていない。しかしヴェーバーにとって「教養」は決して重要でないということではなく、むしろ隠れたテーマを成しているように思われる。本論は主として『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（1904-05/1920）の論述に拠りながら、ヴェーバーにおける「教養」のテーマを析出することを試みる。まずはヴェーバーが好んで用いた「生活態度」という概念と対比して、「教養」概念との意味論的構造の相似性を明らかにし、次にカルヴィニズムの「禁欲的生活態度」を敬虔主義の感性的で内面的な「生活態度」と具体的に突き合わせることで、後者の「教養」的な特質を浮き上がらせる。そして最後に、この論文末尾に出てくる「精神なき専門人」および「心情なき享楽人」のヴィジョンにヴェーバーの「教養」批判を読み取る。

キーワード：マックス・ヴェーバー、教養（ビルドゥング）、生活態度、禁欲、敬虔主義

* A lecturer in the Faculty of Economics, and a research fellow of the Institute of Human Sciences at Toyo University